
魔法少女リリカルなのはSt r i k e r s ～掃除係の六課生活～

うどん屋TANUKI 広島支店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers（掃除係の六課生活）

【Nコード】

N4923S

【作者名】

うどん屋TANUKI 広島支店

【あらすじ】

これは陸士108部隊から派遣されたただの掃除係であるプロシードの物語。

彼の仕事は機動六課を綺麗にお掃除する事！

果たして、彼は試験運用期間1年の間、何事もなく掃除する事はできるのだろうか・・・

※餅がのどに詰まって転生とほぼ同時進行です

ぷろろーぐ（前書き）

あれそういえば事務員とか一般局員とかが主人公の物語はあるけど、掃除係って珍しくね？という安直な作者の発想から生まれた物語・

お楽しみいただけたら幸いです・・・

では本編、始まります

ぷろろーぐ

三人称 side

ここは陸士108部隊、一人の男が異動を言い渡されていた
異動自体はよくある事なのだが……

「古代遺物管理部機動六課……ですか？」

「そうだ、お前さんにはそこで頑張ってもらおう」

「ですが自分は、ただの掃除係、何故自分がロストログア担当の部署に……？」

そうこの男、ただの掃除係なのだ

「ただの掃除係とは、随分と謙遜してるようだな。プロシード・グレンジャー陸曹長」

何か含みのような言い方をする108部隊の部隊長、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐
なぜ掃除係ごときが陸曹長の肩書きを持っているのかと言うとそれはまた別のお話……

「何を言ってるんですか、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐」

「まあ、とにかく決まったことは仕方が無い一年間がんばれよ」

男、プロシード陸曹長は仕方ないと言わんばかりの表情で了承する

「分かりました……で、異動はいつなんですか？（まあそう遠くない日だろう）」

「今日だ」

「は？」

プロシードの口から何とも言えぬ間の抜けた声がもれる

「正確には、今から1～2時間後に異動だからな」

「ギリギリじゃないですか！まだ用意もしてないですよ！」

1～2時間後に異動というものはや有り得ない通達にあせるプロシード

「まあ、そう慌てんな。荷物はお前さんの部下であるアヴァンシア・クロノス二等陸士に荷作りをしてもらう」

「ええ！！またですかあ！」

急に無茶なことを頼まれたアヴァンシア二等陸士は悲鳴に近い声を上げる

「ごめんな、毎度毎度」

プロシードはアヴァンシアに謝る

「うう、先輩にそんな事言われちゃったら断れないじゃないですか」

「車はギンガに出させるから、じゃあなプロシード陸曹長」

「はい、プロシード・グレンジャー陸曹長、本日より機動六課へと
出向します」

「おう行つて来い」

「行つてらっしゃい先輩」

「行つてきます」

そしてプロシードは六課に出向するため108部隊の駐車場へと向かう

「今日はよろしく、すまないな急に」

「いいですよ、悪いのはうちの父ですし」

「………どういうこと？」

異動の連絡は今日きたと思っていたプロシードにとってゲンヤが悪いとは到底思っていなかったため、GINGAの発言には驚いた

「だって昨日来た辞令を父は「あいつの驚く顔が見たいから」って
伝えなかったんですよ」

そしてGINGAも口から漏れた新事実にもはや、驚きを隠せないプロ
シード

「なん………だと………」

「本当にすみません」

「いや君は悪くないよ……行こうか（部隊長め、次会ったら覚えてろ）」

「は……はい」

そして機動六課へと向かうプロシードにギンガ
なんとか約束の時間までにはギリギリ間に合い異動初日から遅刻と
言うことだけは避けられた

「じゃあ、ありがとうギンガ」

「はい、頑張ってください……スバルの事もよろしくお願いします」
どうやら、プロシードとスバルは知り合いのようでギンガからスバルの事を頼まれる

「分かった、またな」

「はい」

そう言うと、ギンガは車を出しその場を去る……そして残されたプロシードと言うと

「さて……部隊長室は、ドコだ？」

渡された書類を見て呟く、そうこの男が持っている書類には部隊長室どころか隊舎内部の地図すら書いてないのだ、そしてこの書類を渡してきた人物はゲンヤであることプロシードは全て気づいた

あの部隊長……やりやがった……

「これじゃあ、遅刻するぞ……」

残された時間は残り5分……果たして、プロシードは間に合うの
だろうか……

「……人を探すか」

走る事約2分、プロシードはちいさな赤髪の女の子を見つけた

「あの……すいません」

「なんだ？」

「えっと部隊長室って何処ですか？」

「なんだ、お前はやてに用か？」

「（はやて……あつ八神はやて部隊長の事か……）はい」

「丁度良かった、アタシもはやてに用があったんだ、ついて来い」

「はい、助かります（こんな小さい子まで、でも階級章を見る限り
三等空尉……上司になるのか）」

無事、部隊長室に着いたプロシードは部隊長室の扉を開ける

「失礼します、本日から異動となりましたプロシード・グレンジャ
ー陸曹長であります」

「ああ、そう畏まらんでもええよ、みたところ年上やし」

「ですが……」

「ええって、そうやった……私はこの部隊の部隊長、八神はやてやよろしく」

「（独特なイントネーションで話す人だな）はい、よろしくお願いします」

プロシードは今まで聞いたことのない独特のイントネーションに少し驚く

「ヴィータもおったんか」

「うん、そうだよろしくな、アタシの名前はヴィータ……階級は三等空尉だよろしく」

「はい、よろしく願います」

ヴィータはプロシードと友好の意味を込め握手をする

「そうやった……プロシード陸曹長、聞きたい事があったんやった」

「はい、何ですか？」

「プロシードさんは掃除係なんよな？」

「はい、そうですが・・・」

「で・・・階級は？」

はやてはプロシードに詰め寄る

「陸曹長ですが・・・」

「そこや!!」

はやては部隊長室どころか隊舎に響き渡るような大声を出す
それに驚きつつプロシードは返答する

「な・・・何ですか」

「ただの掃除係がなんで陸曹長やねん!! おかしいやろ!」

「はあ・・・そう言われましても・・・」

はやての怒号に戸惑うプロシード

「確かに、なんで陸曹長なんて階級を掃除係が持ってんだ？」

「えっと、これを見てください」

プロシードはモニターを二人の前に出す

「「こ・・・これは・・・」」

二人が見たものとは・・・!

ぷろろーぐ（後書き）

次回はキャラ紹介ですね・・
餅もそのうち更新したいと思います
では～

きゃらしょうかい

今回はキャラ紹介です

主人公のプロシード・グレンジャー陸曹長にその部下、アヴァンシア二等陸士の紹介をします

名前 プロシード・グレンジャー

階級 陸曹長

年齢 23

容姿 割と整った中性的な顔立ち。女装をすれば女性にも見えるが、髪の毛は短めなので男に見える

性別 男

性格 綺麗好き、人助けも。ようするにお人好し

魔力量 Fランクあるか無いか位

魔導師ランク A+

デバイス

名前 リナー

形態 1st モップ。近接戦闘、床掃除に特化した形態

2nd 雑巾。防御形態、拭き掃除に特化した形態

3rd 箒。近く中距離戦闘、掃き掃除に特化した形態

バリアジャケット

よく掃除をしている人が着ている作業服を連想させると分かります

この作業服には、プロシードの思い入れが・・・

色は、うすい水色です

デバイスが掃除用なのは、仕方が無い事です

なんで魔力量がFランクなのに魔導師ランクがA+なのは、後に明かされていきます

名前 アヴァンシア・ロード

階級 二等陸士

年齢 17

容姿 可愛いらしいかんじ

性別 女

性格 優しい、子供好き

魔力量 A＋

魔導師ランク A－

デバイス

名前 現時点では秘密

形態 1st 杖、砲撃や射撃に特化した形態。一般的な局員のデバイスに少し手を加えたかんじ

バリアジャケット

一般局員のバリアジャケットそのもの……

こんな感じですかね、まあ後々加えてく予定です

ではでは

くりくん1 (前書き)

こっちの方が、執筆が進みますW W W
しかも、こっちの方が人気が
でも餅の方もしっかり更新しようかと

くりくん1

前回のあらすじ

「「こ・・・これは・・・」」

二人が見たものとは・・・！

三人称side

二人はプロシードが出したモニターを見て絶句する

「・・・・・・ガジェット撃墜数500機を称え、貴殿を陸曹長に昇格する」

書いてある事を読み上げる

「・・・・なんやこれ」

「いや、書いてある通りですが・・・・」

「おかしいやろ！自分掃除係なのになんで500機も撃墜しとんねん！！」

「どうやって倒したんだ？」

ヴィータが問う

「えっと、デバイスを起動してもよろしいですか？」

どうやら、500機撃墜の秘密はデバイスにあるようで起動しているかとヴィータとはやてに聞く

「訓練場を、使ってええから覚悟しとき！……とその前に部隊の皆に挨拶やついてき、もうそろそろ皆集まってくる頃やから」

「はい」

そして場所は変わって六課のホール

何人もの人が集まっている

「みんな、今日は新しい人を紹介するで……六課の掃除係を担当してくれるプロシード陸曹長や」

「プロシード・グレンジャー陸曹長であります、皆さんどうぞよろしくお願いします」

拍手がされ、無事自己紹介が終わり解散となったのだが、残っているメンバーが少し……

「スターズの二人はどうしたんや？」

「いや、その……」

オレンジの髪の少女、ティアナははやての質問に口ごもる。なぜな

らば・・・

「シードにいい！久しぶり！」

「ああ、元気だったか？スバル」

「うん！部隊長が言ってた新しい人ってシードにいいことだったんだ！」

「まあ、俺は掃除係だから特に関わりは無いと思うけど」

会話が続きすぎるので以下略

「あの二人知り合いだったんかい」

「はい・・・実はプロシード陸曹長の事になるとあの子歯止めが利かなくなって・・・」

「・・・・そうや！プロシード陸曹長！」

「なんですか？」

「スバルとイチヤイチヤすんのもええけど訓練場でジェット50機撃墜の実力見せてもらおうか」

「あ、了解です。スバル離れなさい」

「はいい」

「・・・・・・500機！？」

「そうやったよなあプロシード陸曹長？」

「はい、そうです」

「まあ、とにかく訓練場に行こか」

ところ変わって訓練場

「シャーリー、よろしく」

「分かりました、八神部隊長」

シャーリーはモニターを操作しビル郡を出す

「へえ、凄いですね」

「ここならデバイスを起動してもええよ」

「分かりました・・・リナー、セットアップ」

「セーットアップ」

なんとも言えぬ間延びした女性の声が聞こえあつという間に、プロシードの制服が白のような水色の作業服に変わりその右手にはモップというなんともシュールな格好になった

「では始めましょうか・・・どうしたんですか？八神部隊長」

「・・・・・・・・何やその格好」

「え・・・・・・・・自分のデバイスとバリアジャケットですが・・・」

「・・・・・・・・まあええわ、シャーリー」

「動作レベルと攻撃精度は・・・？」

「まずはCや」

「分かりました」

シャーリーはモニターを叩きガジェットを5機出す

「じゃあ始めますよ～レディ・・・・・・・・・・ゴー！」

シャーリーの合図とともにプロシードが飛び出した

くりりん1 (後書き)

今回はかなり短いかも・・・
プロシードが陸曹長になった理由は人に言えないだけであれだけではないんです

次回は初戦闘です

蒼 龍一様感想ありがとうございます

くりくん2（前書き）

初戦闘！何と今回はプロシードの隠された力が今明らかに！

はい嘘ですごめんなさい、チート主人公じゃありませんし・・・
ではくりくん2が始まります

くりくん2

三人称side

シャーリーの合図とともにガジェットに向け走り出したプロシード、そして徐に作業服の懷から何かを取り出した

「あ・・・あれは・・・」

はやてはそれを見て驚く、何故ならばそれは・・・

「マ・・・マジック●ン・・・やと・・・」

そう、皆おなじみマ●ックリンなのだ

「八神部隊長、マジック●クリンってなんですか？」

シャーリーはマジックリ●を見たことが無いようではやてに尋ねる

「あれは・・・私が住んどった地球にしかない洗剤や・・・なん
でプロシード陸曹長があんなものを・・・」

「不思議ですね、プロシードさんミッド出身なのに・・・」

ミッド出身のプロシードが何故マジック●リンを持っているのか・・・
問い詰める内容が増えたはやてであった

はやてとシャーリーが話しているとプロシードがガジェットの一機
と接触した

「リナー、カードリッジロード」

「了解しました」

カードリッジを3発ロードしモップ部分ではなく引っ掛ける部分に魔力が集中する

そしてプロシードはリナーを槍のように駆使しガジェットに叩きつけるがFランク+カードリッジの魔力では、AMFが効いており装甲が少し凹み隙間が開いたただけ

しかしプロシードはすぐさま隙間が開いた部分に●ジックリ
ンの噴射口を入れ

「まずは一機！」

ノズルを引き洗剤を発射、少しするとガジェットからバチッという音が聞こえ動かなくなった

「せこっ！」

はやてからそんな声が聞こえるが此処は戦場、卑怯もクソも無いといった表情でプロシードは二機、三機と同じ方法で片付け、あっという間に終わった

「終わりました、八神部隊長」

「……ちよつとええか」

色々ツッコみたい気持ちを我慢しプロシードに質問するはやて

「はい、何ですか？」

「あのマジックリ●はどこで手に入れたんや？地球でしか売ってないはずなのに・・・」

「あれは、数年前日本で掃除屋をしてた時に・・・あつ掃除屋と言っても暗殺とかじゃないですよ」

「それは分かっとる、でも何で日本におったんや？管理局員なのに」

「……黙秘します」

「部隊長命令や、言うて貰おうか」

「流石に部隊長命令を使われると・・・」

「言ゆう気になったか？」

「黙秘します」

部隊長命令を使われ言う素振りを見せてなお言わないプロシードの「黙秘します」発言にずっこけるはやて

「なんでやねん!!」

「部隊長より上の階級の人に口止め食らってるんですよ」

「マスター、なんであのババアの事言わないんですかあ？」

まだプロシードがバリアジャケットを着ているため、モップ状態のリナーから声が聞こえる

「……リナー、待機状態に戻れ」

「分かりましたあ」

プロシードに言われ待機状態の指輪に戻るリナー

「あのババアって誰や？プロシード陸曹長」

「………黙秘します」

「八神部隊長、あのババアっていうのは」

「失礼します!!」

「あっ！ちょっと待ちい!!」

プロシード、は 逃げた。した。

「行ってしまいましたね、プロシードさん・・・」

「むう、今度は逃がさへんで覚えとれよ」

またところ変わって六課の寮

「全く、リナー極秘事項は言うなってあれほど・・・」

「べつにいいいいんじゃ〜無いんですかあ〜」

「良くないよ・・・」

「あっ！シードにい！」

「お久しぶりです、プロシードさん」

「おお、スバルにティアナか・・・後ろの二人は？」

「この子達も、FWのメンバーだよ！」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります、この子は飛竜のフリードです」

「きゅくる〜」

「そんなに硬くならなくても良いよ、俺はプロシード・グレンジャー、掃除係だよ。よろしくな」

プロシードは、二人にあまり重圧をかけまいと階級を言わずに自己紹介をする。まあ最初の集会で言っているのだが・・・

「はい、よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「きゅくる」

自己紹介も終わり、食堂へと向かった五人だがこれがまずかった
なぜかというと

「あのね、シードにはね凄いだよ！」

スバルがプロシードの事を教えてあげるからといって話し始めたからである

「例えばねえ……」

「それでえ……」

「だからねえ……」

クソ長いので以下略

ティアナはこれじゃあエリオとキャロが……と思ったのだが純粋な二人は

「凄いです！プロシードさん！」

「カッコいいです！」

な状態になりプロシードは

「いや、そんな事無いから・・・スバルもそんなに持ち上げない！」
そしてこの状況を見て嫉妬しているエリート執務官とそれをなだめている教導官が

「う・・・うらやましい！エリオとキャロにあんなに慕われるなんて！」

「まあまあフェイトちゃん落ち着いて」

「なのはは分かってないよ！あんな笑顔、最近私見てないんだよ！」

「うーん、それを言われると・・・」

「ううううう！(ギリギリ)」

拳句の果てに歯軋りまで、美人が台無しです

「(今凄い寒気が・・・)」

「でねでね、シードにはね！」

「スバル、いい加減やめなさい」

このままではヤバイと思ったのか止めに入るティアナ

「ええーここからがいい所なのにー」

「いいから、プロシードさんもすみません」

「いいよ、でもそろそろ教導の時間じゃあ・・・」

「「「「え・・・・・・・・」「」」」」

只今の時刻 13：25

教導開始時間 13：30

「「「「わあああゝ!!」「」」」」

「（時間が!）」

慌てるFWと、教導官・・・

「は・・・早くしないと・・・」

「ま・・・まずいですよ、ティアさん! エリオ君とスバルさんの料理がこんなに!」

「わあああ! 早く食べなさい!」

「「了解!!」」

「わ・・・私も早くしないと!」

そのころヴィータさんと言うと

「なのはの奴おせえな、いつもならもう来てるのに・・・何かあったのかな」

一人さびしく待っていました

そして、5分後

「お前らおせえぞ！なのはもだ！罰として全員訓練所5週だ！！」

「「「「ええ〜！！」」」」

ヴィータの怒号が響き渡ったとか・・・

くりくん2（後書き）

主人公にあるまじき行為でガジェットを粉碎！

劇中ではホログラムでしたが、スバルのパンチで爆発してたのでシ
ョートも再現されているかと・・・

あとスバルにプロシードのことを語らせたら軽く3日はいきます

ではまた次回！

くりくん3 (前書き)

消えたああああああああああ！！！！

保存しときやあ良かったあ！！

ちきしょうめえええ！！！！

すいません、某総統閣下のようになっていました

くりりん3

プロシードside

今日はとある許可を貰うため部隊長室の前まで来ている。

本来ならここには来たくはなかったのだが、仕事の関係上仕方ないのでここに来ている。

とりあえず、部隊長室へと足を踏み入れる

「失礼します、プロシード・グレンジャー陸曹長であります」

「あっ！プロシード陸曹長！！この間のこと喋っ・・・」

「黙秘します」

もう何度目になるのか分からない八神部隊長とのやり取りを済まして本題に移る

「八神部隊長」

「何や、言う気になったんか？」

・
この一瞬じゃありませんって、俺どんだけ口が軽いんですか・・・

「いえ、実は今日ここに来たのはデバイスを自由に起動できる許可をいただきたくて」

「ええよ」

「なんか、えらいアツサリしてますね。如何したんですか？」

「あのデバイスの形態やどうせ掃除に使うんやろ」

流石この年で部隊長になっただけの事はあるなく、凄い洞察力だ。と言っても普通に想像できるか

「ええ、そうです。では失礼します」

「ちゃんと掃除せよ」

子供じゃあるまいしと思いつつも返事をする

「了解しました」

まあ起動許可出す代わりにあの人の名前を出せよとか言われなくて良かった

「じゃあ早速、リナー・・・セットアップ」

「おっけい」

相変わらずコイツは眠たそうだな。まあとりあえずセットアップも済み制服が作業着になり、右手にはモップ状態のリナーが現れる

とりあえず仕事についての説明を・・・

ここ機動六課には掃除班がA・B・C・D・E・F班と6つありそれぞれ5人体制で班が組まれている

A班は食堂、寮のトイレ担当

B班は寮の廊下、階段など担当

C班は大ホール、中ホール担当

D班は管制室、および通信室担当

E班はブリーフィングルーム、休憩室

F班はデスクワークルームにその他諸々

そして俺は毎日シフトが変わり

月曜日 A班

火曜日 B班

水曜日 C班

木曜日 D班

金曜日 E班

土曜日 F班

日曜日 休日

となっている。

まあ、俺は手伝いなのでそこまで頑張らなくてもいいのだが掃除が楽しいので結構な量をやろうと思っている

今日は火曜日なのでB班の手伝いになるのかな

とりあえずB班の班長が「廊下を掃除してくれればいいから」と言っていたのでモップで掃除した後、雑巾で乾拭きすればいいかなと計画を立てる

「よし、やるか！」

気合をいれ、モップを片手に走り出す。念のため言っておくが決して水で濡らしたりしてない。

個人的な理由で月に一回しか水で濡らして掃除はしないようにしている

30分もすると寮の廊下を全て拭き終わり、残すところ雑巾がけとなった

「リナー、2ndモードだ」

「りょうかい」

「レディ……ゴウ！」

リナーを2ndモードの雑巾にしこれまた走り出す

余談だが雑巾掛けは全身の筋肉を使うのでこれを結構な頻度でやると、かなり体が締まる。

これにより俺は魔力をあまり使わずとも、ガジェットに追いつけるようになった。

教導にも入れたらいいのにか思ってるのは内緒だ

さらに2時間後

あっという間に終わったな……。まあ、5人も居るし普通かな？

これから暇だと考えていると訓練所の方から音が聞こえてきた

「なんか、面白そうだな。見に行ってみようかな。」

この後俺は好奇心に身を任せ訓練所に行ったことを死ぬほど後悔した

プロシードsideout

くりくん3（後書き）

今思うと掃除班の人数が多いですね。

六課立ち上げの挨拶の時の人数並みかな？

でも、裏方さんだしこのくらい居ても不思議じゃないよねとか思いつつ

ではまた次回～

くりくん4

プロシードside

自分に課せられたノルマ分の仕事もクリアし、暇を持て余したので訓練場のほうに行ってみる事に。

「ん、お前は確か・・・」

あ、この子は確か道案内をしてくれた赤毛の子だ

「プロシード・グレンジャー陸曹長であります」

「そうだったな。そういえば、ちゃんと自己紹介してなかったな。あたしはヴィータ、階級は三等空尉だ。よろしくな」

「よろしくお願いします」

こんな小さいのにしっかりしてるなあ

「で、お前は何をしに来たんだ？」

「仕事が終わって暇になったので、訓練を見に来たんですよ」

「はあ！？お前、掃除班のシフト見たけどこんな速く終わるわけ・・・」

う・・・疑われてる・・・

「終わりましたよ。終わってないのにこんな所来たら減給じゃないですか」

「それもそうだな（プロシード？どっかで・・・）」

「新人FWはどうなんですか？」

俺が見た限りじゃあ荒削りだけど結構いい動きしてると思うが。

あつ、ティアナのカードリッジが詰まった・・・

「ヒョッコにしちゃあいい動きだけどまだまだだな」

「へえ、厳しいですね」

おつ、キャラがエリオにブーストをかけて・・・

「決まりましたね」

「お前、煙が掛かってて見えるのか？」

「槍術を少しやってたんで、なんとなく分かるんですよ」

「ほう、それはおもしろそうだな」

ん・・・後ろから何か声が、と思って振り返ると凄いおっぱ（ry
もとい凄い覇気を纏った人が

「えっと・・・」

「ああ、すまない。私はシグナム、階級は二等空尉だ。よろしく頼む」

「はい、自分はプロシード・グレンジャー陸曹長であります」

何か、嫌な予感しかしねえ。

でもってこういう時の予感は今よくあたるってゲンヤさんは申ししておりました

「プロシード陸曹長、槍術の心得があると言ったな。」

「はい、一応は」

なうんだろ、シグナムさんの目がだんだんヤバげに・・・

「私と模擬戦をしないか？」

はい死亡フラグ来たコレ

「あのう俺、魔力の総量シグナム二尉の1／1000も無いですよ・・・」

「安心しろ、手加減はする」

「すまねえなプロシード。シグナムは少しでも腕に覚えのある奴を見つけると見境なく、これで何人犠牲になったことか・・・」

犠牲・・・だと・・・

「あの、ホント少しかじった程度ですよ」

「ふっ、構わんさ」

人生終了のお知らせ。しかも上官のお願いなので断ることが出来ん

「分かりました。じゃあ午前中の訓練が終わってからですよ」

「とか言ってる内に終わったぞ」

・・・・・・俺、この模擬戦終わったら掃除するんだ。

「よし行こうじゃないか」

「あ・・あのシグナム二尉、許可は・・」

「さっき主はやてに頂いた。問題はない」

八神部隊長エ、仕返しですね分かります。

ところ変わって訓練場内

「じゃあ、これからプロシードさん対シグナムさんの模擬戦を始めます」

高町教導官、苦笑いしないで止めてくださいよお・・

「シードにいなら勝てるよ！頑張れ！！」

スバル、勝てないから。相手は歴戦の猛者だから！こっちは少しかじった程度だから！！

「レディ・・・・・・・・ゴゥ！」

あっ・・・・・・・・始まった

「行くぞ、プロシード！」

「来なくてもいいですから」

「レヴァンティン！カードリッジロード！」

「ja」

えっ・・・・・・・・手加減するって言ってたのに・・・・・・・・レヴァンティンも返事しなくていいから！

「紫電・・・・・・・・・・」

レヴァンティンが炎を纏ってるよ、防ぎきれぬきしねえ

「リナー、カードリッジロード！！」

「おっけー」

「エクスプロードブースト！」

カードリッジを三発ロードし、その魔力を使い眼前で爆発を起こし爆風に取り後ろに下がる

「・・・・・・一閃!!」

なにあれ、喰らってたら死ぬって絶対!

「ほう、よく避けたな。まだまだあ!」

「シードに凄い!」

凄くないからギリギリだから

「リナー!カードリッジロード」

「ふんふふ〜ん♪」

またカードリッジを三発ロードする。この危機的状況で鼻歌とかド
ンだけ暢気な・・・

カードリッジの魔力を使い、リナー全体に魔力を行き渡らせる

「行くぞ!紫電一閃」

またシグナムさんが炎を纏ったレヴァンティンを振り上げてくるが・
・・・

「なっ!」

何とかリナーを使って受け流し、力の向きを逸らす

「(こいつは、なかなかやるな。久しぶりに楽しめそうだ)」

そしてすぐさま後退、その時見えたシグナムさんの顔がにやけてたのは気のせいだと思いたい。

「レヴァンティン！」

「Explosion. Schlangeform」

「飛龍！一閃！」

何か、レヴァンティンが鞭みたいになってコッチ飛んで来たんですけどお！

「くう！リナー2nd！残ったカードリッジを全部ロードして！」

「おっけい」

雑巾形態になったリナーを前に出しありったけの魔力をかき集め防御に回す。

レヴァンティンとシールドが拮抗する

そして間もなく意識が飛んだ

くりりん4（後書き）

この小説でのシグナムさんはちょっとバトルマニアが酷くなっています

ぶっちゃけ、この主人公は対機械だとかなり強く見えますが、対人だとかなり頑張ってもこの程度です

紫電一閃を防げたのは、主人公の過去に理由が……

まあ物語が進んでいくうちに明らかになっていきます

ではまた次回！

くりりん5 前編(前書き)

A CのC Mのさよなライオンを格好よくした、キングさよなライオンというのがある？ んですけど、先日ソイツのクリアファイルをゲットしました！

グレートありがとウサギもあつたぜ！ 買っていないけど・・・

分からない人には分からない話題でしたね
スイマセン

ではくりりん5 前編始まります

くりくん5 前編

プロシードside

あれ・・・シグナムさんが無茶振りをしてきて模擬戦になって紫電一閃をいなしたまでは良かったんだけど、飛竜一閃っていうのが来て・・・

「あゝ死んだのか」

「まだ生きてるわよって、シグナムのあれを喰らったら死んだと思うてもしょうがないわね」

死んだ発言をしたら、金髪の綺麗なお姉さんが否定した？のかな

「あの、ここは？」

「ここは、医務室よ。私はシャル、六課で医務官をやってるわ。よろしく」

「よろしくお願いします、シャル医務官。自分はプロシード・グレンジャー陸曹長であります」

何でこうも六課は美人が多いんだ？顔でも基準に採用してるのか？

「シャルでいいわよ♪。痛いところとかは無いですか？」

「いえ、特には」

シャルさんの笑顔にちよつとドキツとした。

「鍛えてるのね。じゃあ、念の為湿布を幾つか処方するから攻撃が当たった腹部に貼ってね」

「はい、分かりました。シャルさん」

湿布をシャルさんから受け取ると同時に、アラートが隊舎に鳴り響く

その後すぐにモニターが現れる

『山岳リニアレール内にガジェット出現しました。プロシード陸曹長、出動してください』

「はい？出動？」

え……意味分からないよ、俺は掃除係だよ。戦闘員じゃないよ！しかもあれだよ、医務室送りにされてたんだよ！何言ってるのこの紫眼鏡君！

『ええ。ティアナ・ランスター二等陸士が訓練中に足を捻挫してしまつて、貴方しか居ないんですよ』

それじゃあしょうがないか、副隊長陣は万が一の時に残して置きたいし……

「すみません、プロシードさん。」

「うおっ、吃驚した！……足は大丈夫なのか？」

ティアナが後ろから突然声をかけて来たので吃驚した。

「はい、初出勤だったのに情けないです。」

「気にすんな、ゆっくりしてろ。じゃあ行って来ます！」

とりあえず出動が掛かったので指示のあったヘリ発着場に急ぐ

「あっ！シャルさん、リナーはっ・・・」

「はい、次は忘れないようにね」

「すみません！」

「まったく、マスターもわたしみたいな（以下略）」

リナーが自分の事を誉め始めたのでそれを無視し走り出す。

そして到着

「プロシード・グレンジャー陸曹長、只今到着しました」

「うん、全員揃ったね。じゃあ皆ヘリに乗って！」

「「「はい！」」」

「・・・はい！」

高町教導官の指示でヘリに乗り込む。あり、キャロが少し緊張して

るな。励ましてやるか

「キャロ、そんなに怖がることは無いさ。隊長達も付いてるし俺やスバル、何よりキャロの王子様エリオが付いてるだろ」

「ちよっ、プロシードさん何言ってるんですか!?!」

「あれ、キャロのこと嫌いなのか?」

「エ・・・エリオ君、私のこと嫌いなのか?」

「そ・・・そんな事はないけど・・・」

「じゃあ、好きなんだ」

「いや・・・あの・・・その・・・」

面白いな、でもそろそろやめてやるか。キャロの緊張もほぐれてきたし

「冗談だよ、冗談」

そして道中、リイン空曹長が一回転して変身したり高町教導官が飛び降りながら、セットアップしたりと。

そうこうしてる内に目的地のリニアレールに到着した

「まずは、スターズとプロシードだ。プロシード、頑張れよ!」

「了解! いくぞスバル」

「うん！ シールドにい、スターズ1！」

「クリーン0・・・」

「行きます！」

スバルと俺も空中でセツトアップしてリニアレールの上に到着、
リック反応があつた場所へと向かう

「・・・ガジェット多すぎじゃね？」

生きて帰れるのか？これ・・・

くりくん5 前編（後書き）

すこしアニメを見直したので前後編に分けました！

それでもはや掃除係カンケーない！という立ち位置に……

あ……ティアナには犠牲になって貰いました。アーメン

では次回ノシ

くりくん5 後編

プロシードside

リニアレールの上にスバルと共に着地したのだが

「何だこれ、多くないか？」

そうガジェットの数聞いていたのよりかなり多いのだ

報告で聞いた数はおおよそ30体ほどだがぱっと見、屋根の上だけでも20〜30体は居る

「何コレ、聞いてたのと違うよ。どうしよシードにい！」

「落ち着け、スバル。憧れの高町教導官から教えて貰ってるんだろ」

「……………そうだね、うん少し落ち着いた」

落ち着いたようだな

「じゃあ、お掃除開始だ」

「マツハキヤリバー！」

「リナー！」

「「カードリッジロード！」」

互いの相棒の名前を呼び、カードリッジをロードする
そして二人同時に飛び出した

俺はいつもの戦法でガジェットを使い物にならない鉄屑にしてい
くスバルはシューティングアーツを駆使し、一体一体と確実に仕留め
ている

マジツ●リンの残量が少なくなったところで、屋根の上のガジェ
ットの掃除が終わった
屋根の上で、この量とかもう2本と・・・心配だな

まあいざとなったらあれを使えばいいか

「スバル、大丈夫か？」

「うん、大丈夫！」

「中に大量にいると思うから入ったら俺の指示と同時に・・・」
スバルに予め指示を出して、中に入るが・・・

「なんかゴキブリみたいだね」

「1体いるところには、30体いるってか。洒落にならないぞ」

思ったより数が多いな、70はいる。
でかいのも5体いるし・・・あのタイプには何故か洗剤が効かない
んだよな

「まあいいや！スバル！」

スバルに指示を出す。

「一撃！必倒オ！デイバイイン……うっ!？」

「ちっ、AMFがきついな……」

ガジェットの何体かがAMFを全開にして魔法行使を阻害しデイバインバスターをとめる

「なんとか……バリアジャケットを保ってるが、キツイな」

「あれを使いますか？」

「そうだな。リナー、残ってるカードリッジを全部ロードしろ。スバル、上に戻れ」

「え……でも……」

心配してくれてるのはありがたいが……

「今から使う技は人が居ると危ないから」

「……うん、気をつけてね」

「ああ、お前はエリオとキャロのほうに行ってやれ」

「行ってきます！」

スバルも行ったようだし秘密兵器を使いますか

「リナー、あれを転送しろ」

「りょうかい」

そういつてリナーに転送させたのは一つのマシンガン、といってもエアガンを改造しとある薬品を打てるようにしたもの。よって銃身の横にはボトルが取り付けてる機構がある

改造したのは俺ではなく、アヴァンシアが改造してくれた

本人曰く「こういう改造って楽しいんですよ」とのこと

まあ説明はここまでにして、一本の洗剤に手をつける。中身は洗剤ではない薬品だ。しかも劇薬

洗剤ボトルをマシンガンのボトル口に取り付ける

「リナー、バリアジャケットを維持しつつ待機状態に戻れ」

先程使ったカードリッジはバリアジャケットを維持するためとシルドを展開するためのもの

待機状態に戻ったところで、銃を構える

「くたばれ、ガジェット共！」

そして引き金を引くと、前にいたガジェット達は風穴が開きそこから溶けていく

いくら、レーザーを撃とうとしても破壊されるので意味はない

次々とガジェットは爆発していく、もちろんシールドを張っている
のでノーダメージ

案の定、煙が晴れた先には鉄屑しか残っておらずリニアレールの壁
も吹っ飛んでいた

「やりすぎたか？」

「いいんじゃないですか？　というかガジェットの撃退数が600
オーバーしちゃってまゝす」

あんだけ倒しておけば、そうなるか

「はは、そっか。皆の所にいくかな」

床に穴が開いてるので気をつけて進み

次の車両に行くと上に登り屋根の上を走っていると凄いでかいドラ
ゴンが飛んでいた、上に乗っているのは、FWメンバー一同

「おーい、キャロ！それってフリード！？」

「はい、フリードです！」

ちょっと距離があるので声を張り上げる

そして、前を見ると少し先にデカブツが二体いた

「キャロ！少し離れてろ、あいつらは俺が仕留める！」

「でも、装甲が厚いですよ！」

「大丈夫！」

薬品が残り少ないけどいけると判断し、銃を構えて伏せる

「ファイア！」

そして引き金を引き、二体仲良く並んでいるので撃ち抜く

全部薬品を撃ち尽くし二体とも撃破した

「すごい！シードにい」

「凄いです！シードさん！」

「カッコいいです！」

スバル、キャロ、エリオが誉めてくれた

「レリックはどうした？」

「封印しました！」

「そうか、偉いな」

「プロシード陸曹長！！なんですか！それは！？」

あっリインフォース空曹長だ、何をそんなに怒っているのかな

「どうしましたか？」

「どうしたじゃないですよ！何ですかその銃は！？」

そうか、質量兵器に見えるのか

「これは、エアガンですよ。少し改造してますが、許可もとっています」

「それなら、いいです。すみません大声を出してしまって・・・」

「いいですよ」

あとから状況を聞いてみると、エリオたちが車両に入ったときにはガジェットの残骸しかなく、残っていたのはあのデカブツ二体だけだったとか・・・
不思議なこともあるもんだ

プロシードside out

三人称side

ここはとある研究室

紫髪の男がモニターを見ながら笑っている

「タイプゼロにFの残滓……そして……」

そう言いながら男が出したモニターにはプロシードが写っている

「あつ間違えた……」

紫髪の男はどうやら出すモニターを間違えたらしく別のモニターを出す

そこには、ガジェットの間を縫うように動いて破壊している黒い影が

「一瞬だけ洩れた魔力、そしてこの拳法、間違いない……この少年が」

男はその名を告げる

古代ベルカの戦乱の時代、名だたる王達をも圧倒しその名を全次元世界に轟かせた王の名を

かつてその身を賭しベルカの戦乱を止めた、王の名を

そして、聖王と共にゆりかごの礎になった王の名を

「真王^{しんおう}だ」

くりくん5 後編（後書き）

今回は頑張って伏線を引きましたよ！

真王とは一体！？

今回出て来た改造エアガンの中に入ってる薬品はご想像にお任せします

コレを作ったアヴァンシアの出番はいつになるのやら（分からない人はぷろろくぐかキャラ紹介を見てね！）

ではまた次回～

くりくん6

プロシードside

山岳リニアレールでの事件が無事に終わり、一日が経ちました。

信じられるか？廊下の雑巾掛けからリニアレールまでが火曜日だったんだぜ。

という訳で今日の俺の担当は大ホールです、聞くところによると六課立ち上げの際に八神部隊長が直々にご挨拶なさったところのようですね

広いホールなので俺を加えた4人で掃除をし、残り二人は中ホールを掃除してくれています

いやあ掃除班があるのは助かるね、108にいた頃なんかパートのおばさんが数人と清掃会社のお爺さんが一人という絶望的な状況での清掃

時々、アヴァンシアが手伝ってくれたときもあったけど・・・

正直、俺が今まで培ってきた掃除スキルが無ければ即死だったよ（隊舎の汚れた意味で）

おのれゲンヤ部隊長、この悪魔め！と言わざるを得なかったね

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？今考えると俺が抜けたら1
08の掃除、終わらなくね？

あとでアヴァンシアに聞いてみよつと

「プロシード陸曹長、こちらの掃除も終わりました」

「ご苦労さまです、こちらの掃除はすでに終了しているので解散しますか」

さて、掃除も終わったし訓練でも見に行くか？いや一旦自室に戻ってアヴァンシアと連絡取るか

次にすることが決まったので自室に戻ることを決めた

★☆☆☆☆

というわけで自室に戻りました

「リナー、モニターを出してくれ」

「りょうかい、会話用？メール用？それとも仕事用ですか？」

俺は携帯端末などを持っていないのでリナーに様々な機能を詰め込んでいて空き容量がギリギリになり、もう他の機能が積み込めない状態になっている。

「メール用だ、宛先はアヴァンシアにしといてくれ」

さっき話したようにアヴァンシアに108の掃除事情を聞くメールを出す

「……………送信っ」と

メールを送信し終わると、10秒もたたずにメールが帰ってきた

「速くね？まっいいか。何々？」

とりあえず帰ってきたメールに目を通す

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ!?

「何だこれ？完全に費用ケチってたのかよ。ゲンヤ部隊長!!」

「ますたゝ、そんなにおこらなくとも」

「いいや、コレは許せん!」

おっと、俺が怒っている内容が分かり辛かったな。
アヴァンシアが送ってきたメールにはこう書いてあった。

先輩へ

メールありがとうございます。

こちらの事を心配してくれるなんて先輩は優しいですね。

掃除については問題はありませんよ。

先輩が抜けた後、ゲンヤ部隊長が手配した掃除屋さん達がすぐに沢
山来て、元いた掃除係の方々と仲良く掃除をしているので。

ゲンヤ隊長は「プロシードのおかげで費用が節約出来たんだが、無いものねだりをしてもら」
と仰っていました

先輩、頼りにされてますね

メール、これからも時々くれると嬉しいです

アヴァンシア

アヴァンシアよ・・・俺は頼りにされているんじゃないかって上手いこと利用されてたんだよ

「まったく費用があれば使えばいいのに・・・」

「まあまあ、これからどうします？」

そうだった。掃除のノルマも終わってやる事が無いんだ。

訓練見に行くか？

「シグナムさんにく殺される気ですか？」

却下だな

お菓子作りを……

「ますたーはお菓子なんか作れませんよね？」

なんてこったい

じゃあ愛しの彼女と素敵な……

「自演乙です」

（・・ω・・）ショボーン

「というかますたー、趣味があつたじゃないですか」

「あつ、そうか。よし材料買いに行くぞ」

リナーの一言でやりたいことが決まり早速、私服に着替え外に出る
移動手段はもちろん徒歩。俺はバイクなんて持ってないのでこうい
う時はいつも歩いている

まあ、割と近場なのでよしとする

3〜40分歩いていると目的のお店へと到着した

店名は「無限の香料」と何処かで聞いた事のあるような名前である
そしてここは主に香料を扱う店であり、ここでは俺の求めているア
ロマオイルも可也の種類が置いてある

「いらっしゃいませ〜」

店内に入り籠を取り、俺の求めていたアロマオイルの100ml瓶
2つと小瓶が10本ほどセットになっている物を3つ買い、もう一
つ目当てのものを5kgほど買う

100ml瓶はオレンジとパインが入っていて（パインといっても
松の木の精油です）

小瓶詰めの方にはペパーミントやジャスミン、ユーカリなどが入っ
ている

値段は日本円で30000円ほどだ……もうちつと安くなら

ないかな？

買い物も済ませたので隊舎に帰る

また歩くこと3〜40分、機動六課へと到着。もう夕方ですね

少し先に見えるのはFW陣と高町教導官・・・おっとスバルがこちらに気付いたようだ

「シードにい！どこ行ってたの？なにその手に持っている紙袋？」

質問が多いな・・・っと皆も集まってきた

「仕事が終わってから暇だったから買い物、この紙袋は「お菓子？」違うよ。香料と石鹼の素」

「プロシードさん、石鹼作るんですか？」

「ああ、一応な。趣味で・・・高町教導官、何笑いを堪えているんですか？」

ティアナの質問を答えていると高町教導官が必死に笑いを堪えておりました。

俺のガラスのハートが粉々です

「す・・・すいません・・・・・・・・・・ふふっ」

「もういいです・・・まあ自室に荷物を置いてきます、FWの皆にはその内石鹸をプレゼントするから」

そう言い残し俺は自室に戻る。後ろから「私の分は！？」という声が聞こえた気がしたけど気のせいです、ガラスのハートを傷付ける人なんて俺は知りません

後日談

あの後食堂で高町教導官にせがまれるので諦めて作ることに

元から全員分作るつもりだったけど・・・

くりくん6（後書き）

プロシードの趣味発覚！

今回短めかもということも発覚！

そして原因不明の食中毒発覚！（マジ

まさか、あの時食べた生肉のユツケが・・・（冗談

お腹痛くて仕事休んで時間の感覚が狂って・・・もう散々だよ！

ではまた次回！

くりくん7 in うみなりっ! 前編

プロシードside

たった今、とても重大な問題が発覚した。

俺の今後の人生にかかわるような問題が発覚したんだ。

何が問題かって? あれが無いんだよ

まさかそこまで消費しているとは思ってもいなかった

そこまで重大ではないがあれがないと凄く困る。

え? さっきからあれあれ言ってる分らない?

あれって言うのはな・・・・・・・・・・・・・・・・

「マジック●ンが無い・・・・・・・・だと・・・・・・・・?」

そう主婦の味方、マジック●ンが無いのだ。

結構あったはずだけど、部屋にあるのは空の業務用ボトルしかない・
・・

「ますたーがバカスカ使ってたじゃないですか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・幸い今日は日曜日だ、

向こうに買いに行こう」

「話をそらさないで下さーい」

そう、今日は日曜日。シフトも入っておらず平和な日。

よって地球に行ってマジツ●リンを買いにいけるのだよ。大量に買い置きせねば

にしても、消費が凄まじい。ガジェットに使いすぎたな……

何はともあれ思い立ったが吉日、善は急げ。という訳ですぐさま着替え部屋の外に出る

「よし行くか……エリオ、どうしたんだ？そんなに急いで？」

俺が部屋の外に出ると軽く走っているエリオに出くわした

「今から出張任務なんですよ」

「どこに行くんだ？」

エリオに出張任務の行き先を聞く

「えっと……第97管理外世界、惑星名称は地球。その世界の日本という国の海鳴市にロストログアが出たらしくって……」

キタコレ、これに上手く付いていければあの面倒くさい手続きを踏まなくてすむ。ロストログアナイス

運賃も浮くし……これを逃す手は無い

「今から俺も行くんだけど、一緒に行ってもいいかな？」

「今から……ですか？ 部隊長に聞いてみないと分からないですが……」

そうか、八神部隊長の許可がいるのか……

まあ、とりあえず行かなきゃ何も始まらないのでエリオと共に集合場所であるヘリポートに行くことに

☆☆☆☆☆☆

そしてところ変わってヘリポート、六課の主要メンバーがほとんど揃っている

ロストログア相手とはいえ、こんな人数で行かなくても……

敵さんが攻めてきたらどうするのかな？ 全滅しちゃうでしょ……こりゃ

「あれ？ 八神部隊長がいませんね」

「なんでここにいるの？プロシード陸曹長？」

高町教導官、聞きようによつてはひどいですよその言い方

「実は・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺がここに來た理由を話すと皆納得してくれたようだ

その後部隊長に連絡を取り許可を貰った

どうやら部隊長は別のところからくるようだ

その時に何故か俺まで任務協力をする事に、まあタダで地球に行けるんだしいつか

そしてヘリの中に乗り込む六課メンバー一同

転送ポートに着くまでの間、リイン曹長が小学生くらいのサイズになり俺とFW陣は吃驚した。でも小さい

到着すると、すぐにポート内に入り地球へと向かう

話によると転送先は高町教導官のお友達の別荘だとか・・・・・・・・・・セ
レブエ・・・・・・・・

そして転送

「むう・・・・・・・・何時まで経ってもこの感覚に慣れないなあ・・・・・・・・」

「シードにい、酔ったの？」

「いや、酔ってないが……な」

俺はどうにも転送ポートが苦手で酔うわけではないけど、こう体が浮いてるような感覚に陥ってしまう

どうにかならない物か……

「それにしても、いいとこだな」

「湖畔のコテージって感じですかね」

「太陽もひとつだし……」

「自然の匂いも一緒です」

ティアナはともかくエリオとキャラが……

キャラは野生児チックな事言ってるし、そしてエリオ太陽が何個あると思ったんだ？

あれ……何だあの車？

「こっちの世界にも自動車があったんだ」

前言撤回。何言ってるのティアナさん。

貴女の中で地球ってどんな扱いしてるのでせうか？

いくら魔法文化が無くっても流石に自動車位はあるでしょう、

「なのは！久しぶり」

車の中からシャルさん（偽）が現れた。

え．．．何？姉妹？いや、髪形が被ってるだけか．．．やっぱ
りこの人も美人さん

どして隊長たちの周りとかには綺麗な人しかないんだろ？謎だな
それはそうと、俺は高町教導官に買い物へと行く許可を取る

「あの、高町教導官。楽しくお話してるところ申し訳ないのですが、
洗剤を買いに行ってもよろしいですか？」

「いいですよ」

「なのは、この人は？」

「自己紹介をお願いしますか？」

高町教導官に頼まれたので金髪さんに自己紹介することに

「プロシード・グレンジャー陸曹長、23歳です。よろしくお願
いします」

「アリサ・バニングスです。よろしく．．．っていうか年上に見
えないわね」

「ははは．．．よく言われます」

最近、年上に見られない事が多々あるな

酷いときは高校生に見られる……年齢的に大学を卒業してるんですけどね！

「言葉遣いも丁寧すぎるわ」

「はぁ……善処します」

年下の人に説教されんのも久々だ

「ま……まあアリサちゃん……その辺にしといて……」

「あ……あのう、そろそろ行ってもよろしいでしょうか？」

そろそろマジックリ●を買いに行きたい

「あ……そうだ、今から食材を買いに行くから、貴方も一緒に連れて行ってあげるわ」

結構ありがたいお誘いを受けたので甘えることに

「はい、よろしくお願いします。じゃあまた後で」

とりあえず立派な車内へ入ることに

「おっきいですね」

「そうかしら？ ああ、途中で一人拾っていくから」

「了解です」

車にエンジンがかかり走り出す。というかまだ大学生なのにバニングスさん、しっかりしてるな

車の運転免許なんてつい最近取ったのに・・・

「バニングスさんは何処かのご令嬢なんですか？」

「まあ一応は・・・・・・・・・・。言葉遣いがホント固いわね。アリサでいいわよ」

むむ・・・・名前で呼ぶのはもっとう、仲良くなってからじゃないのかな？

「えーっと善処します、バ・・・・アリサさん」

「さんも要らないわよ。あんたの方が年上なんだし」

貴方からあんたに呼び方が格下げ・・・・・・・・だと・・・・

気にしないけど

「初対面の人にはこうなってしまうんです」

「ますたくはホントへたれですね」

うおっ！吃驚したあ！リナーめ急に喋りやがって。

「あれ？あんた魔導師なんだ？なのは達とどっちが強いの？」

どうやらアリサさんはデバイスのことを知ってるらしく俺に分かりきった事を聞いてくる

「高町教導官達の方が圧倒的に強いですよ・・・俺なんか5秒と持たないでしょうね」

あれ・・・何か自分で言ってる涙が出て来た・・・

ちなみに5秒っていうのは高町教導官の場合が砲撃のチャージタイム。

ハラオウン執務官の場合は10秒は持つ。高速機動型は昔の訓練で慣れたから見えるだけけど・・・それで頑張って初撃をガードする。リナーが壊れるかもだけど・・・

八神部隊長は高町教導官と同じ。広域型ほど厄介な人はいない

でも切り札を使えば、1分は持つ。でもとある人と戦うとき以外使わないことにしてる。

もうその人死んでるけど・・・つまり使わない

でもホントにやばい時は使うかも。

「あんた男の癖に情けないわね・・・でもなのは達が相手じゃあしようなないか」

しょうがないです。あの人たちの性能はもうハイスペックを通り越

して廃スペックですから

リミッター付けてAランク以上とか有り得ん。もはや凡人に喧嘩売ってるとしか思えない

「ははは……つとあの人ですか？拾っていく人って」

俺が指を指した先には紫の髪の綺麗な人と八神部隊長がいた

「ええ、そうよ。」

とりあえず車から降り挨拶をする

「プロシード・グレンジャー陸曹長、23歳です。よろしく願います」

「月村すずかです。よろしく願います。」

この人もホント綺麗だな。

「えっと……失礼ですけどホントに23歳ですか？」

「はい、俺そんなに若く見えますかね？」

本日二回目の年齢詐称疑惑

そして八神部隊長は口を押さえて頑張ってる

「八神部隊長、笑いたいなら笑ってください」

「W W W W」

「笑えば良いと思うよ」って言ったら芝を生やされた

「ごめんな、ちょ面白くて」

そういうながら背中をバシバシ叩かれる

「いえ、構いませんよ・・・もしかして八神部隊長もはじめてあった時・・・」

「書類が無かったら年下だと思っと思ったわ」

年上といってくれたのは書類があったからか・・・

「ま、まあ買い物に行こう。アリサちゃん、プロシードさん」

「そうですね、では八神部隊長また後ほど」

「またな」

八神部隊長と別れ、買い物先へと向かう

今日の買い物先は任務中にもお世話になったデパート「海鳴デパート」というところに向かう

海鳴デパートは可也の数の専門店が集まって出来たデパートであり様々な商品が揃っている場所でもあり、生活用品で欲しいものがここに無ければ、生産停止になっていても可笑しくは無いと思えるほど大きなデパートなのである

アリスさんと月村さんは鉄板焼きの食材とジュースなどの飲み物を買いに来たらしい

「アリスさん、月村さん。食材は大量に購入しておいた方がいいですよ」

「もちろんそのつもりだけど？」

「いや、うちには二人ほど凄い奴がいるのでホント多めに買っておいたほうがいいですよ」

二人っていうのはスバルとエリオだ。あいつ等が食べる量は半端じゃない

「まあ、そうするわ」

「あ、俺は洗剤を買いに行くのでまた後で」

「入り口で待っておきますね。プロシードさん」

二人と離れとりあえずATMに金を引き出しに行く

こっちに口座があるのは任務で使っていたから。時々このように洗剤を買いに来たときに入金したり、引き出したりしている

この口座に入っているお金はこちらでバイトや掃除屋をやっていたときのお給料

食費と家賃は管理局から出るので全額バイト代や掃除屋の依頼料が

口座に入るから300万はある

今回は10万ほど引き出し財布に入れる。そして業務用と書いてあるコーナーに向かう

ここには業務用マジック●ン4・5リットルの箱入りが売ってあるのでそれを10個、カートに入れる

箱入りは、単品で買うより1000円以上も安く帰るのでお得。ちなみに四本入りで約7000円

お会計の人がちょっと吃驚していた。普通こんなに買わないもんな
それらを入れてきたカートで入り口まで持っていく。そのまま30分ほど待っていると、アリサさん達が買い物を終えて戻ってきた

「あんた、買いすぎじゃない？何に使うのよそんな量の洗剤？」

「掃除と戦闘です」

あ、アリサさんと月村さんが口を開けて吃驚してる。美人が口をそんなに開けないでください

まあ人に「そんな量の洗剤どうするの」って聞かれて「戦うために使う」って答えるとか考えられないもんな。掃除が霞んで見える

「せ・・・戦闘？あんたどんな戦い方すんのよ、目にかけたりするの？」

これまた卑怯な戦法ですね

「違いますよ、この洗剤は機械相手にしか使いませんよ」

「そ・・・そうなんだ・・・」

「プロシードさんって強いんですか？」

この二人、凄い仲いいな。同じ質問をしてくる

「FW陣よりかは強いけど隊長達には適いませんね」

FWって言っても現時点での話。今なら四人相手に勝てる自身があるけど、1、2年したらあいつ等もAA位は行きそうだから勝てなくなるね

「へえ、男の人にも勝てるってなのはちゃん達強いんだ」

「ええ、局でも有名ですし」

強いなんてもんじゃない。兵器レベルです。

月村さんの質問で今気付いた。なんでアリサさんが聞いて気付かなかったのは突っ込まない方向で

気付いたことは六課のパワーバランスが凄い可笑しいこと

ロストロギアを封印するのにSランクオーバーの隊長陣、最低でもニアSランクの副隊長たち、そして未来有望なFW陣

これは些か過剰に対応しすぎなのでは・・・ロストロギア涙目

地上の・・・特にレジアス中将辺りから反感買っているとかいう噂もあるし、何かあるのかな？

まあ、掃除係には関係ないのでどうでもいいですたい

「じゃあ、戻りますか」

「ええ、そうね」

とりあえず車が止めてある場所まで行き後ろに荷物を積み込みカー
トを戻す

「リナー、格納してくれ」

「りょうかーいしました」

そして、買った洗剤をリナーの格納スペースに積み込む

「デバイスってそんな事も出来るんですね」

「ええ、俺のは少し特別なのでこういう事も出来るんですよ」

「じゃあ行くわよ」

買うものも買ったので別荘へと戻る

そして到着。中間の描写が無いのは作者の技量のせい

「あ、プロシード陸曹長。丁度いい所にサーチャーの設置に行きま

すよ」

そのまま間も無く高町教導官に連行されて、公園とか河原とかにサーチャーをばら撒きました。

俺は魔力が少ないのでリナーを出して、カードリッジを9発ロードして3つ設置

維持コストが掛かるので多めにカードリッジを使用した。あまりに時間がたって反応したら消えちゃうかも・・・

その点、リイン空曹長と高町教導官にスターズの二人は凄いな。

ぽんぽんサーチャーを設置して行ってるよ

サーチャーの設置を完了すると、何やら高町教導官が「このまま手ぶらで帰るのも」とかいって携帯を取り出し何処かに電話をかけている

「あ、お母さん？なのはです」

「「「え・・・？」」」

俺とスバルとティアナは驚く。だって高町教導官のお母さんだよ。ヤヴァいよ、きっとバカスカ魔砲を撃つんだろう絶対。高町教導官の魔力があんだだけあるんだからお母さんやらお父さんも半端内魔力持ちなんだろうな。SSSランクとかありそうだな

「うん、でねお土産にケーキを・・・」

ケーキも食べれるっぽい……ケーキ？

高町教導官が電話を切るとスバルが高町教導官に質問をする

「あの……さっきの電話って？」

「私の実家だよ。うち、喫茶店なの」

「」「えええっ！？」」

「喫茶翠屋。お洒落でおいしいお店ですよ」

翠屋……だと……。

「あの、翠屋って士郎さんとか桃子さんって言う人は居ません……よね……？」

そう、翠屋とは俺が地球に任務に来たときバイトをしていた喫茶店なのだ

「居るよ、何でうちのお父さんとお母さんの名前を知ってるの？」

俺オワタ。ぶっちゃけあそこにはいい思い出があんまり無い。給料はそれなりに良かったんだけど。

士郎さんはともかく、桃子さんが……

俺が行けば確実に黒歴史がここに居る全員に知れ渡るだろう。

そうなれば社会的地位が、死ぬ。虐殺されてしまう

「い、いや・・・あの・・・その・・・」

「どうしたのシードにい？物凄い汗かいてるよ、大丈夫？」

「だだだだ大丈夫、大丈夫、さあ行きましょう！」

これ以上怪しまれない為にも平静を装いつつ歩き出す。

うん大丈夫だよ、きっと。あれからもう10年近く経っているんだ。

分かるわけが無い・・・・・・・・はず・・・・・・・・

「ホントに大丈夫かしら、プロシードさん」

「うーん、本人も大丈夫って言ってるし大丈夫なんじゃない？」

「あんなに汗をかいているシードにはじめて見たよ」

「とにかく、行くですよ♪」

生きて帰れるといいな（社会的な意味で）

プロシードsideout

くりくん7 in うみなりっ! 前編(後書き)

プロシードの黒歴史とは一体!?

今回は出張任務編 前編でした。文字数も最大ですね。(多分)

ホントは一話にまとめて書いて投稿しようと思ったけど、それは今までのバランスが崩れそうだったので前後編に分けました

中編もあるかも・・・

そこは作者の力量しだいということでは

では

くりくん 8 in うみなりっ! 中編

プロシードside

俺は今、地獄への扉の前にいる。

地獄といっても外観も窓から見える内装もとてもお洒落な喫茶店ではあるが、俺にとっては地獄でしかない。

出来れば、出来ることならばこの扉を開けて入りたくはない。

「お母さん、ただいま」

実家に帰ってきたらそうですよね。遠慮なんかないですよ。

・・・・・・大丈夫、10年近く経っているんだ。普通なら思い出せないはず・・・

「なのは、お帰り」

桃子さんの姿が変わってなさすぎる、奥から出て来た土郎さんに美由紀さんも全く変わってないように思える。

解せぬ・・・・・・不老の薬でも飲んでいるのか？

そんな事を考えていると、高町教導官が俺たちの事を紹介し始めた

「この子達が私の生徒と同僚の人」

「こんにちは、いらっしやい」

「あ、はい！」

「こんにちは」

「どうも、こんにちは。」

さっそくびびっている俺の精神を無理やり奮い立たせ紳士的に挨拶をする。

反応を見るに、士郎さんはまだ気付いてないみたいだ。

「ケーキは今、箱詰めしてあるから」

「うん、フェイトちゃんと待ち合わせ中なんだけど……. いても平気？」

「もちろんさ」

会話の流れからしてコレは危ない。此の俣だと居座っている間に、
「君何処かで……. ⇒え、いや、その……. ⇒あっ思い出した…….
・」なんて流れに…….

どうする……。圧倒的不利……。つ。

「ああ、コーヒーと紅茶もポットに淹れておいたからな。持っていないってあげてな」

「ありがとうございます」

むむむ……. ここで逃げ出すと怪しまれる。かと言って居座ると、
→の公式が確定してしまう
だが、確立としては後者のほうが低い

なぜならば前者を選択すると「あれ、どこに行くんですか？ プロシード陸曹長？」と名前を言われて思い出しかねないからだ・・・
なら俺は1%でも望みのあるほうに賭けてみる

「じゃあ、皆ここで休憩して行つてね。えーっと・・・」

なぜ桃子さんが何故言葉に詰まったのかを察したようで、スバルとティアナが自己紹介をする

「あっ・・・スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

終わった、この流れでは名前を言うしかないみたいだな
結局どちらを選んでも DEAD ENDだったようだ（主に社会的な意味で）

ここまで来て気付かない確立は0.1%にも満たないだろう

「・・・プロシード・グレンジャーです」

「プロシード・・・？間違ってたら御免なさい。10年位前にうちにバイトしに来ていたプロシード君？」

ハイ終了。短かった俺の人生に終わりを告げ（社会的に）、二の句を告げる

「はい、そうです。お、お久しぶりです。桃子さん、士郎さん、美

由紀さん」

「やっぱり、久しぶりね。管理局の人だったんだ」

「大きくなったな!」

「ホントにプロシード君? 大分おっきくなったね」

三人とも覚えているようだ。

俺の他にもバイトとかいっぱい来てるはずなのに……. ちよつと感動

「覚えててくれたんですか? あれからもう10年近く経ってますよ?」

「ええ、もちろん覚えてるわよ。あっそうだわ! あの時の写真、まだ渡してなかったわね」

これも覚えておいでですか……. だが、スバル達に見せず廃棄処分すれば社会的な死は免れることが出来る……. まだ希望はある!

「あの時の写真って何? お母さん」

「見たいです!!」

元氣いっぱいに見たいって言わないで、スバル

「えっとねえ……. 確かこの辺に……. あったわ!」

「ちよつ何ですか! そのアルバ……. フガフガ!」

止めようとしたら桃子さんに指示されたであろう士郎さんに口を塞がれた。この人は凄く筋力があるのでどれだけ俺がもがこうと抜けることが出来ない

そして、桃子さんの手が『プロシード君の写真集』と書かれたアルバムに伸びていき、ページが開かれる。

「うわぁ〜！可愛い！！」

「凄く可愛いかも・・・ていうかこの子ホントにプロシードさんですか？」

「ホントだね、今より大分ちっちゃいし女の子みたいな格好しているから分らないね〜」

俺の黒歴史がぁ〜！！思い出したくもない過去がぁ〜！！！！！！

「フガフガフガッフガフーガガフガ！（お願いですから見るのをやめて！）」

プロシードside out

リナーside

突然ですがこんなに可愛い可愛い言われているますた〜の過去について少しお話をしましょうか〜

ますた〜はですね〜とある人の依頼を受けその為にこの翠屋に清掃

員として勤めてたんです

ですが、ここ翠屋に勤めるときにますたゝは重大なミスを犯したんですよゝ

ますたゝはね、中々ここで働くことを許してくれない桃子さんにこう言っただけです

「何でもしますから、ここで働かせてください」・・・と

後から分かったことなんですが、ますたゝに依頼した人はもうすでに桃子さんと話を付けていたらしく、別にこんなこと言わなくても働けるはずだったんですがゝ

桃子さんが事前に聞いていたますたゝの真面目な性格を利用？して、言質をとったんですねゝ

ますたゝも男ですから一度言ったことはしょうがないと諦めていました。

で、その後お互いの気心が知れてからは当時のますたゝの可愛らしい容姿を利用して桃子さんがどこから持ってきたかも分からないような、女性用の衣装をますたゝに着せて接客させてたんですねゝ、清掃員なのに

それからというものの、毎日のように写真を撮られ任務が終わるまでずっとそんな感じでしたよ、清掃員なのに（大事なことなので二回言いました）

任務自体は成功したのですがその時のますたゝと来たら、慰めるのが大変でした・・・

まあ、割とすぐ立ち直りましたけど・・・・・・・・

今は流石に無理が……無いとは言いきれませんがやっぱり身長がそれなりにあるので難しいですね。

おっと、そろそろ時間のようですね。またの機会にますたゝの過去をさらしましょうか。

ではまた、いつか

リナ―side out

プロシードside

「でね、これがチャイナドレスでえ……これが……」

もうやめて！俺のライフはゼロよ！もう勝負はついているんだよ！

だがそんな悲痛な叫びを物ともせず桃子さんの手は止まらず、一枚懇切ご丁寧に説明していく。

スバル達はというと先程から「へえ」とか「うわゝ可愛いゝ！」という反応をしている

俺はというと………

「フ、フガフモガグフガアふもっふ！！（い、息が止まる離してください！！）」

という具合に士郎さんの腕の中で永眠しそうになりました。

だってスリーパーホールドみたいに首を絞められて口を塞がれているから、息が出来ないんだよ。

いくら桃子さんが怖いからってそこまで………する

か・・・

何はともあれアルバムを全部見終わった後に離してくれました

「ぜえ・・・はあ・・・こ、殺されるかと・・・思った」

「いやあ、すまないね。桃子には逆らえなくって・・・」

そう言われると反論できない

「昔のシードにはあんな趣味があったんだねっ！」

「無いよっ！お願いだから誤解しないでくれ！スバル」

全員が誤解していそうなので全力全開で否定する。

断じて俺にそういう趣味は無い！

「そういえば、プロシード陸曹長」

「なんですか？高町教導官？」

何やら高町教導官が俺に質問してくる

「10年前に勤めていたんですよね？ここに」

「はい、そうですが。何か？」

「何で私と会ったことが無いんですか？」

「その事ですか。確かに10年前俺はここに勤めていましたが、そ

れは任務のためであって常時ここにいたわけでは無いんですよ」

会えなかった理由を説明する

ここまで来ると、高町教導官は何のことか分かるかもしれない。
だって「10年前」「任務」「海鳴市」で絞るともう答えが出たようなものだから

「もしかして・・・ストップです」・・・どうしてですか？」

高町教導官も気付いたようだが口止めをする

「あの事件自体、特秘事項というかそういう物がとても多い事件ですので」

「・・・?」

この様子だとホントに何も知らされていない感じだな。事件解決をした当事者の内の1人なのに・・・

「ああ、今の発言は忘れてください。ハラオウン執務官も来たみたいですし」

俺たちが話している間にどうやらハラオウン執務官にエリオとキャロが月村さんから借りてきたらしき車で来たようだ
そして俺は皆が注意を取られたその隙に机からアルバムを奪い取りリナーの収納スペースにぶち込む

「ますたー、いきなり入れないで下さーい。こちらにも準備というものが」

「ごめん、リナー。だが俺の人生も掛かっているから……な」
これで何とか全員にばれる事を防いだ。後は切り刻んで焼却処分をするのが妥当だろう

「ああっ!! アルバムがつ!!」

大層残念そうにするスバル、そこまで欲しいか普通？

「迎えに来たよ、なのは……ってどうしたのスバル？」

「あはは、ちょっと……ね」

高町教導官が笑ってごまかす。この人も残念そうにしているが気にしないでおこう。

「プロシードさん、どうしたんですか？ 顔色があんまり良くないですよ」

「だ……大丈夫ですか？」

エリオとキャロがいい子過ぎる。マジ感動

「いや、大丈夫だよ。ありがとなエリオ、キャロ」

とりあえず頭を撫でてやる。すると二人とも照れくさそうになっている
10歳だから恥ずかしいのかな？ それとも嫌だったかな？

「こういうのは嫌だったのか？」

「いえ、そういう訳では無くって!」

「ちょっと、恥ずかしいです／＼／＼／」

どうやら前者のほうだ。もうそんな年頃なのかな？

そんな事を思っていると全員のデバイスからロストログアの発見を知らせる音が鳴り響き、全員の顔に緊張が走る

「じゃあ皆お仕事の時間だよ! 切り替えていこう! 反応場所は第四海鳴河川敷、FWはフェイト隊長の車でそこに向かって! プロシード陸曹長はすみませんが走りです! では各自出動!」

全員

「了解!!」

俺だけ扱いが酷かったような気がするがとりあえず了解と言う。

第四海鳴河川敷は走ったら5分程度掛かる所にある。だが普通に走っていくなどという事はしない

「士郎さん、桃子さん。ここでデバイスを起動してもよろしいでしょうか?」

「ええ、良いわよ。」

許可も取れたので翠屋の中でセットアップを済ませる

「リナー、カードリッジを8発ロードしてくれ」

「おっけ」

リナーに指示しカードリッジをロード、そしてカードリッジ分の魔力を使い不可視魔法を掛けて脚力を残りの魔力で強化をする

あたりに排挾されたカードリッジが散らばるが全部拾ってこれまたリナーの収納スペースに入れる。
ごみを出すなんて論外ですから。

「じゃあ、いってきます!」

「はい、いってらっしゃい」

そして俺は翠屋を後にし河川敷へと向かった

くりくん 8 in うみなりっ！ 中編（後書き）

更新遅れてすみませんっ！

今回遅れた理由としては

- ・10000字オーバーで中編まで出来ちゃったこと

- ・スランプが来て息抜きに最近いじってなかったMHP3rdをしてみた事

この二つです。一万字オーバーは読みづらいと思うので辻褄が合うように分割してたんですが、MHP3rdの方は何やってるのかって感じですよね

でも終焉を喰らうものがクリア出来たのでうれしかったです

次回更新は割とすぐになると思います

今後はこういうことの無いよう頑張って行きたいと思います！
では～

くりりん9 inうみなりっ! 後編(前書き)

更新遅れてごめんなさい。

週一更新とか言ってこの有様……

本当に申し訳ないです

原因?何かやる気がおきなくてずっとぷよぷよしてました御免なさい

※今回のお話はサウンドステージとは少し違う点がありますが突っ込みは無しで

河川敷に向けて1分ほど走っていると到着、と同時に魔力切れ（カードリッジの）

「ふう、あれか。今回の対象は」

俺の視線の先には話に聞いていた通りスライムがたくさんいる。FW陣も配置について今まさに戦闘が始まろうとしている所である。隊長たちは上空で結界の強化をしているようだ。今回はフォワード陣の様子見らしい。危なくなったら助けることの出来る範囲に入るようだし大丈夫だと思う

「プロシードさん！フォローをお願いします！」

「ああ、了解！」

俺に気づいたティアナが指示を出す。その指示に従い河川敷に下りてスバルとエリオのいる前衛とティアナにキャロがいる後衛の丁度間より少し後ろに下がる

「ティアナ、あいつに4，5発弱めでいい。魔力弾を撃ってみてくれないか？」

とりあえず動きを見る為、ティアナに魔力弾を撃ってもらおう。

「分かりました、スバル！エリオ！少し下がって！」

「了解！！」

スバルとエリオがティアナの指示で下がり、スライムが多い地点に魔力弾を5発ティアナが撃ちこむ。

だがその魔力弾は見えない壁に阻まれ掻き消された

「バリア系！？」

「はあああああ………うりやあっ！……っあちゃあ結構硬いよ」

その後すぐ流れるようにスバルが突っ込んで蹴りを入れる。流石長年コンビを組んでいるだけのことはあるなと思った……がバリアは抜けないようだ

「スバルが蹴ってもダメか……チビッ子二人は何か無い？」

「電気を使ってみましようか？」

「それはダメね。出来るだけ無傷でって依頼だから、ホントはさっきのスバルの攻撃もいけないんだけど……」

エリオは持ち前の魔力変換資質を使って何とか出来ないかとティアナに相談するが、依頼主の出した条件があるので、それは却下される。

「じゃあ、私が無機物召喚で捕らえるのはどうですか？」

「バリアの出力が問題だけど、それならいいわ。キャロ、やってみて。」

キャロが使える召喚魔法を試してみることになる。

「じゃあ行きますっ！錬鉄召喚！アルケミックチェーン！」

スライム達の足元？に桃色の魔法陣が現れそこからいくつもの鎖が出るが、それもバリアで防がれる。

しかし今度は一体、バリアを張らずに鎖を避けているやつがいた。それをティアナは瞬時に見抜き、全員に指示を飛ばす

「エリオ、スバル、あれが本体よ。何とかして傷つけずにバリアを抜いて。キャロはあたしの弾丸の強化をお願い。プロシードさんはアイツの足止めをお願いします」

「「「了解！！」」」

ティアナの指示でスバルとエリオはコンビネーションアタックの体勢に。キャロはティアナの弾丸強化、ティアナは封印用の弾丸を作っている。

そして俺はスライムの足止めをしにかかる。

「リナー、カードリッジロード！2発だ！」

「おっけー」

モップ形態のリナーから二つのカードリッジが排夾され、一つは脚力強化にもう一つの魔力は魔法行使のため残しておきスライムとの距離を一気に詰めてバインドを放つ

「マジックバスケット！」

そして目の前にミッド式の魔方陣が現れその魔方陣自体がスライムを飲み込むように包む。

魔法陣の形を模したバインドがスライムのバリアと拮抗し、少しの間スライムの動きが止まる。

「ストライクッ……ドライバー！」

その間にスバルとエリオのコンビネーション技が決まりバリアが破かれ

「バレットS！シューーッ！！」

ティアナがそこにキャロのブーストが掛かった弾丸を撃ち込み封印を終わらせる

最後にキャロが隊長たちに申し出て暴走しないように完全封印を施し任務終了。

……だが今回の戦闘が少し気に入らなかったのかティアナが少し浮かない顔をしていたので話しかけてみることに

「ティアナ、どうかしたのか？」

「い……いえ、何でもありません」

「そっか、何かあったら六課の誰かに相談してみな。皆優しいからきつと力になってくれるさ」

「はい、ありがとうございます」

返答に詰まるところを見るとやはり何かしら悩んでいるようだ

ここはティアナの悩みを解決してもらう為、アリサさんの別荘に移動しながらスバルに念話で話しかける

「(スバル、ちょっといいか?)」

「(どうしたのシードにい? 念話なんかで)」

「(ティアナが何か悩んでいるみたいだから・・・さ、何時でもいい相談に乗ってあげてくれ)」

「(いいよ、ティアのためなら一肌でも二肌でも脱ぐから!)」

何とも頼もしい返事が返ってきた。これなら任せても大丈夫だと思う。

そうこうしている内に着いたようだ

「それじゃあ任務も終わったし帰ろうか・・・と言いたいところだけど」

到着と同時に何かを言おうとしている高町教導官。だがその続きは八神部隊長が言う

「現地の方がご飯も用意してくれとるし汗もかいてるようやから、ご飯を食べた後銭湯に行きたいと思います」

「それじゃあ料理が出来るまでの間にFW陣は湖のほうに飲み物を

取りに、プロシード陸曹長は食器の配膳をお願いします」

「」「」「了解!」「」「」

指示が出されたので各自持ち場に着くことに。

とりあえず食器がおいてある場所をこの家の主である、アリサさんに聞くことに

「アリサさん、食器はドコにありますか？」

「それなら……」「どういうことや?」……何はやて?」

何やら八神部隊長が怪しげな笑みを浮かべながら聞いてくる

「いや、何でプロシード陸曹長がアリサちゃんのことを名前で呼ぶのだるのかと思ってな」

「あ、確かにそうだね。私のことも高町教導官って呼ぶし……」

高町教導官もそれっぽい雰囲気をもとって聞いてくる
どうやら色恋沙汰か何かと勘違いしているっぽい。

「それはアタシが堅苦しいから名前で呼べって言ったのよ。敬語も抜けて言ったんだけど……」

「何やおもろくないな」

「でもプロシード陸曹長、アリサちゃんのこと名前でも呼ぶんだっ
たら私たちのことも名前で呼んで欲しいな」

「上官相手にそれはちょっと……なのでお断りします」

普通美人からこんなお願いをされればOKをするだろうが相手は上官だしそんな事はしない

しかしこみ上げてくる罪悪感がハンパじゃないので……

「えっとその、ご……ごめんなさい！」

逃亡しました。胸元に入れたりナーが何か言っているが聞こえませ
んぜ

「ヘタレやなく。別に謝らんでもええのに」

「ちょっと残念だね。折角仲良く慣れそうなのに……」

とりあえず逃げて別荘の中に

お皿とかの場所をまだ聞いてなかったことを今気付く

「あつ。聞くの忘れてた……」

「全く逃げるからですよ。まあ良いです。エリアサーチ、目標・
・確認。ここから廊下を真っ直ぐ行き四つ目の角を左に曲がると
右手にある部屋です」

「やっぱりお前凄いな。」

「そうですか？」

リナーの指示通りの道を進むとドアがありそこを開けると食器棚が並んでいる。食器を取ろうとすると通信が入った

『プロシード陸曹長？食器棚の場所、分かりましたか？』

「はい、リナーが教えてくれました。何かあったんですか？」

『えっとね、私たち以外に三人来たからとりあえずその分食器の追加をお願いしたいんですが』

「分かりました。ではまた後ほど」

高町教導官からの通信をこちらから切りお皿を次々と重ねていく。

しかし……

「む……重ッ……。り……。ナー、頼むうつ」

「はーい、少しは考えてくださいねー」

何も考えずに大量に持ったため思うように口が動かない。
だが上手く収納できたようで手元にあった大量のお皿は音も立てず
にしまった

「はは、ごめんな。あとスプーン、フォーク……」

その後も様々な食器をリナーに入れ俺はバルコニーのほうへと向かう

「あのさ、割れて・・・ないよな？」

割と高そうなお皿だったのでとりあえず確認

一応大丈夫だと思うけど。

「はい大丈夫ですよ」

「そうだよな・・・よかった」

まあこんなやり取りをしつつ到着
と同時にアリサさんからの質問

「ちょっとアンタ。食器どうしたの？」

「ああ、ちょっと待っててください。リナー綺麗に食器を並べて」

「私だって何でも出来ると思ったら大間違いですよ」

リナーがそろそろお疲れのようで、愚痴を言い出した

コイツは疲れるか面倒くさくなると愚痴を言い出すのですぐに分かる

まあ口ではこんな事を言っているがテーブルの上にキッチンと並べて
出してくれているようだ

「手品みたいね。」

「よく言われますね。リナー、スリープモードになって休んでな」

「ふう………」

リナーをスリープモードに移し休ませる。

「じゃあはやての料理が終わるまで待ってましょう」

「あの、八神部隊長って料理が出来るのですか？」

「おうっ！はやての料理はギガウマだぜ！！」

なんの唐突も無くヴィータ副隊長が現れる

「そうなんですか？」

「ああ！はやては凄いんだ！お前も感動するぜ！」

何だか途轍もなくテンションがあがっているヴィータ副隊長。
こうまでしているのを見るととても部隊長の料理が楽しみになってくる

「ヴィータ、プロシード、シャマルを知らないか？」

慌てたよう様子でシグナム副隊長がこちらに来る

どうやらシャマルさんを探している模様

「いや、見てないけど……」

「こちらも見かけていませんね」

「そうか……」

「というかシグナム、お前シャルルのこと見てなかったのかよ!」

ヴィータ副隊長がシグナム副隊長に向かって怒鳴る。

何か問題でも生じたのだろうか？

「すまない。一瞬目を放した隙に……」

「シャルさんが何かしたんですか？」

「いやな、アイツは料理をするのが好きなんだけど……」

「大体の確立で失敗するんだ。普通の失敗ならまだしも、病院沙汰になる可能性が高い」

副隊長たちの話を聞いてみて纏めるとシャルさんが料理が下手だということが分かった

そしてシャルさんを食堂という舞台へ足を進めている可能性が……

しかも見失ってから30分は経つらしい。ならばもうすでに犠牲者が出ているかもしれない

『スバルッ!』

少し離れた……調理場のほうからティアナの悲鳴に似た声が

聞こえる

「まさかっ・・・・・・・・・・！」

「くっ！遅かったか！」

「ちくしょう！」

状況がいまいち掴めていないアリサさんを除いた皆が調理場へと走り出す

「スバルッ！！！」

だが時すでに遅く、そこには無残にもその若い命を散らせた・・・・・・・・

「どうしたのシードにい？」

わけでは無くピンピンとしている様子のスバルが居る

「え・・・・・・・・いやだって・・・ティアナが・・・・・・・・あれ？」

「ああ、さっきの大声のことですか？すみません、スバルがつまみ食いをしようとしてましたから注意をしていたんです」

「どうやら先程聞こえた大声はスバルのつまみ食いを注意したもののようだ

まあ目の前にはかなり豪勢な料理が並んでいるし無理も無い

「よかった」

「だがしかし、主はやてとシャルは・・・・・・・・？」

「だがしかし、肝心のシャルさんと料理を作ったであろう八神部隊長が居ない

「えっとシャルさんはこの料理を作ったあと八神部隊長と一緒に来客を迎えにいました」

「そうか。プロシード、皿の殺菌を頼む」

「えっと分かりました」

指示に従いポケットから殺菌消毒液（50ml・・・水で3000倍に薄めてから使ってね！）という極めて濃いものをチョイスする。

これはかなりの効果を期待できる代物でありもし薄めずに使うとお皿まで溶かしてしまうとか何とか。

だが副隊長たちの反応を見るにバイオ兵器とも遜色ないものと見て間違いない。

まあ、とりあえず許可を取る

「シグナム副隊長これを使用しても・・・」

「大丈夫だ」

OKの指示が即出たので料理に適量かける

すると・・・・・・・・

シュワワワワワワワ・・・・・・・・

料理が跡形も無く消えた。皿まで消えないところを見るとかなり毒性が強かったようだ

「プロシードそれ凄いな!」

「えっと念の為、バケツを用意してその中にこの薬品を混ぜた水を入れますのでそれに浸けておきましょう」

「バケツは合ったぞ。水を注げばいいのか？」

「はい、半分ほど注いでください。」

俺が指示を出した通りにヴィータ副隊長が水を入れてくれた

そこに原液を容器の蓋になっているスポイトを使い一滴バケツの中

にたらず

その後調理場にあったゴム手袋を使いお皿をその中へ浸ける

そしてすぐに八神部隊長と高町教導官、そしてハラオウン執務官に居ないと思っていたエリキャロが、ゲストを連れて戻ってきたようだ。

シャマルさんは何か一瞬にして副隊長たちに怒られている

「じゃあ皆揃ったし、ご飯にしよう。この人たちの紹介はその時に。それじゃあ皆料理を運んで」

八神部隊長の声と共に皆で料理を運ぶ

ところ変わってバルコニー。

「じゃあ飲み物も行き渡ったし……本日はお疲れ様でした。乾杯!!」

全員『乾杯!』

「じゃあまず、今回お世話になった皆さんと今来てくれた人の紹介。そしてFW陣とプロシード陸曹長の紹介やね。じゃあ……アリスちゃんから」

「私から? まあいいわ。アリス・バニングスです、この場所を駐屯所として提供しました。なのは達よは昔からの友達で……」

アリスさんが自己紹介をしている最中に眠っていたリナーが小声で話しかけてきた

「マスター……マスター……」

「……何だ？こんな時に？」

とりあえず小声で俺も返す

「実は仕事の依頼のメールが来てるんです……」

仕事とは俺個人で清掃作業を請け負っていて多分そのことだと思う

「……どこから？」

「ホテル・アグスタです……」

よりにもよってホテルアグスタからの依頼

ここは割りとお得意様でオークションを開く前に大体依頼が来る

「……今から？」

「はい、大きなオークションが近々開かれるようで……」

これは断れない。メールを見ると結構な給金が出るし……

目の前の料理は残念だけど仕方が無い

「八神部隊長、すみませんが急用が出来たので自分はこれで」

「なんや残念やなあ。で、その用事っていうのは？」

「はい。清掃の依頼が来たので」

「分かったわ、それじゃあ任務お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

その後転送ポートに向かい本局まで戻り、依頼があったホテルアグスタまで向かうことにした

くりくん 9 in うみなりっ！ 後編（後書き）

えらい中途半端な終わり方

普通に終わらせることが自分の文才では出来ませんでした

どうにかならないかなあゝ

次回更新は出来るだけ頑張ります

くりくん10(前書き)

TPP決定されたって事は、二次創作全般も不味いですよね…

つまり完結してすらないこの作品の未来は一体…

くりりん10

プロシードside

管理局本局から依頼のあったホテル・アグスタに向かうためタクシーを拾い運転手に目的地を告げる。

「本日はどこまで？」

「ホテル・アグスタまでお願いします」

車に乗り込み運転手と他愛の無い会話をし、アグスタへと到着。

「じゃあこれ代金です。釣銭はいいですから」

「ええ、ご利用ありがとうございました」

端金だったので釣銭ごと運転手に渡し車から降りる。

それと同時にスーツを来た一人の男性がこちらへと歩み寄ってくる。

「プロシード・グレンジャー様ですか？」

「はい。本日まで依頼を承ったプロシード・グレンジャーです。今回はどのような依頼ですか？」

メールには仕事の内容が書いておらず場所と時間だけ書いてあった為どのような仕事をするのかを聞く

「それにつきましては今夜はもう遅いので一度ホテルの部屋でお休みになられてからまた明日仕事内容をお伝えします。部屋は予め用意してあるのでそちらを。それと夕食はもうお済ですか？」

「いえ、まだです」

そういえば八神部隊長が作ってくれた夕食を食べていないのを思い出し答える。

「分かりました。これは部屋の鍵です。二階の205号室になります。夕食は部屋にそのまま運びます。それと資料は食事を運びに来た従業員から受け取ってください。それではまた明日、よろしくお願いします」

「はい」

男性と別れホテル内に入り、指定された205号室に入室する。着替えなどは全てリナーの中に入っており身辺整理はしなくてもよいので30分ほどのんびりしているとドアがノックされた。

「はい」

「プロシード様、お食事と資料を持ってきました。」

ドアを開けると料理がワゴンに乗せられた形で室内におかれ従業員の女性から仕事の内容が書いてある紙の束を受け取る

「お食事は食べ終わった後にワゴンに乗せて廊下に出して置いて下さい。それでは」

女性が部屋を出た後ずっと静かだったリナーが口を開いた。

「ますたー、そろそろ充電がまずいです。一度充電してください。」

どうやら充電が少なくなったらしく、充電を催促してきた。

通常、デバイスは充電がいらず使用者の魔力を使って動いたり、高価なものになると使用者に負担を与えないよう周囲の魔力素を取り込み動く。

リナーはそのどちらでもなく充電した電力で稼動エネルギーの9割を賄って残りの1割は空気中の魔力素を使って動いている。

これは俺自身の少なすぎる魔力を電力で補う為に積んだシステムであり「エレキハイブリットシステム」と呼ばれているものである。コレもまた高価なものなのだが、貯蓄に余りがあったのと試作機と言うこともあってかなり安く積むことができた

「そうだな。リナー、プラグを繋ぐぞ。」

制服の内ポケットからコードを出して片方をコンセントに、もう片方をカード状のリナーの充電用の端子に差込み充電をする。充電中なのでカード中央の宝石が点灯している。

「さて、夕食を食べるか。」

ワゴンに乗っているお皿を全て机に置く。

「いただきます。」

見た感じメニューはパンに茸のスープ、ステーキとデザートにチョコレートのケーキとまあごく一般的なホテルのディナーといった感じかな？

見た目、味ともかなりのものでとても美味しく頂けた。

「ごちそうさまでした。」

食器を全てワゴンに寄せ廊下に出しておく。
そして資料に目を通す。

「明日は7時半からか……。今は9時半だから早めに寝ますかね。」

明日の朝は早いので体を起こす為早めに寝る。
とりあえず充電中だったリナーを起動させ着替えとタオルを出し、アラームを設定し又充電させる。

シャワーを浴び今日一日の疲れを取り寝巻きに着替えてベッドに入る。

ふう…明日は仕事を速く終わらせて六課にも……。どっ……。……て…
……。……それ……。……か……。……zzz

プロシードsideout

☆★☆☆☆☆☆☆☆☆

三人称 side

朝。

pppppp.....

「ん……。」

けたたましく鳴り響くりナーの宝石部分を押し止めベッドから起き上がるプロシード。

彼は寝ぼけている頭を起こすためか覚束ない足取りで洗面所に向かい顔を洗う。

「ふああ……よしっ！」

顔を洗い部屋を出ると充電が終わったりナーを起動して、制服を出し着替える。

そして机に向かい資料を再度確認し始める

「えっと……今日の6時に食堂に集合。朝食を食べた後、7時半にロビー前に集合し割り当てられた担当場所

に着き清掃開始。清掃場所については資料右下に書いてあるので各自目を通して置くように、清掃作業が終わり次第帰宅してよい。ただし各場所にいる班長に確認をしてもらう事……か」

一通り資料に目を通すと時計に目を向ける。

据え置きデジタル時計の表示は4時15分、プロシードは座っていた椅子から立ち上がると冷蔵庫に小銭を入れ中からミックスジュースの入った缶を取り出しそれを飲む。

「ふう。折角速く起きたんだからリナーのメンテでもするか……」

プロシードは余った時間でリナーのメンテナンスをはじめる。

「それじゃあメンテナンスセットを出してくれ。それから1stモールドで起動」

「りょうかい」

メンテナンスセットから、オイルとクリーナーを取り出しテキパキとモップ状態にしたリナーをパーツごとに分解して付いた汚れを手馴れた手つきで落としていく。

それが終わると2nd, 3rdとリナーの形態を変えこれらも綺麗にしていく

汚れを落としきるとリナーを元通りに組みなおし、待機状態に戻す

「さて………と。終わったな」

「ありがとうございます。そろそろ集合時間ですよ、食堂にいきましよう」

プロシードが部屋にあるデジタル時計を見ると時間は5時42分と表示されており朝食の時間まで18分となっていた。

丁度いい時間だと思った彼はリナーを制服のポケットに入れて部屋から出た。

廊下を歩き、食堂のある1階に到着した。

ドアを開けるとプロシードと同じような服をきた人が数人席についていた

プロシードは近くの席に着いて6時まで待つ。

しかしこれ以上人は来ず、6時になると食事が運ばれてきた

『どうやら私達で最後だったようですね』

「ああ、そのようだな」

食事を全員が食べ終わると一人の男性が話を始めた

「えー皆様、お集まりいただきありがとうございます。本日は清掃場所の割り当てを発表します……」

まずはファルト様、第一ホールをお願いします。ランド様は第二ホールを、コール様は第三ホールを、そして、ルードヴィッヒ様とプロシード様はお二人でオークション会場の方をお願いします。各担当場所には数名の清掃員と班長が居るのでご協力お願いします。それでは各自担当場所について清掃を開始してください」

話が終わるとプロシードの前に一人の青年が現れた

「あんたがプロシードか？」

「はい、プロシード・グレンジャーです。あなたは……？」

「おっと自己紹介がまだだったな。俺はルードヴィツヒ・T・ヴェ
ルフアイアだ。好きなように呼んでくれ。今日はよろしくな」

「ええ、よろしくお願いします（何だろ…違和感を感じる……）」

プロシードは違和感を感じながらも握手を交わして持ち場へと向かった。

三人称 s i d e e n d

プロシード s i d e

☆★☆☆ホテルアグスタ オークション会場☆☆☆

「うおっ広いな！」

「ええ、もしかしてココに来るの初めてですか？」

反応があまりにも新鮮なのでルードヴィツヒさんに聞いてみる

「お…おう！そうなんだ！」

すると慌てた様子で質問に答えてくれた。

『（この人何か怪しいですよ。妙な魔力反応もしますし……警戒しておいてくださーい）』

「（そうか…それじゃあお前は魔力反応の元を探っておけ）あ。あの人が班長みたいですよ」

リナーからの警告があったので少し警戒をしつつ仕事を進めるため班長らしき人の元に向かう

「貴方達が臨時清掃員ですね。本日はよろしくお願いします」

「「よろしくお願いします（頼む）」」

「自分の担当が終わり次第こちらに伝えに来てください。では」

「「了解」」

班長の話が終わるとルードヴィツヒさんはポケットからカードを出

した

「えっと確か……………」

ルードヴィツヒさんはカード側面のスイッチを入れカードを上に掲げた
するとカードが変形し、リナーと同じようなモップになり落ちてくるソレを綺麗にキャッチした

「よつと。へへっコレ凄いだろ」

「ええ。それってもしかして今流行のCLEー？ですか？」

「ああ、安かったし使い勝手も良さそうだったから買ったんだ。それはさておき掃除をすっか」

「そうですね。リナー、セットアップ」

『了解でーす』

リナーをセットアップし、バリアジャケット作業服型BJに着替えモップ状態のリナーを持つ

「それもCLEか？随分古い型みたいなんだが…？」

『古いとはなんですか。失礼な人ですね。全く…私はそんな端末では歯が立たないレベルの性能なんですよ』

どうやら古いといわれてカチンと来た様子のリナー。
普段より語気が強くなっている……

「リナー、落ち着いて」

まあこのままでは不味いので一旦止める

『……分かりました』

「す、すまねえ」

「気にしないでいいですよ。さて仕事しますか」

「ああ。」

無事リナーも落ち着いたので二手に分かれて仕事に入る。

「さて、掃除をしますか」

まずモップでゴミを集める。

まあゴミと言っても常日頃から掃除されているであろう床には少量の埃しかなかった為、すぐにその作業は終わり次は壁の掃除へと移る。

この作業はリナーを2ndモードである雑巾にして行う。まず手の届く範囲を綺麗にする。

そして……

「カードリッジロードよろしく」

『了解です』

魔法使用の許可は予め取ってあるのでカードリッジを3発ロードし、飛行魔法を使う。

今は陸戦魔道師で登録してあるが、昔は空戦魔道師としてやっていたので魔力さえあれば飛ぶことだって出来る。

何故、空戦から陸戦に転向したのかと言うと簡単に言えばリンカーコアがある事件で欠損して二度と直らない傷を負ったからだ。

だが幸いにもこの傷は欠損した部分のリンカーコアが周囲の魔力素を取りこまないと言うだけで、こうやってカードリッジを使えば失った魔力を一時的とはいえ使えるようになる。

元の魔力ランクはAAランクあったので、カードリッジを大量に使うことでAAまで戻すことが出来る

しかしこれをするとは術者への反動ナリナーへの負担が凄いのでよっぽどの事がないと使わない。

「うん、もう少しかな。」

もう作業が終わりそうなのでスパートをかける。

これが終われば機動六課に戻って掃除をしなければならない。

「ふう……。班長、全ての作業が終了しました」

「ええ。後すみませんがルードヴィッヒ様のほうも手伝ってはくれませんか？些か作業が難航しているようなので……」

「はい。分かりました」

話によるとルードヴィッヒさんが手こずってるようなので手伝いに

行く。

それと同時にリナーからの念話が来る

『（魔力反応の元が分かりました。）』

「（そうか：それでどうだった？）」

『（調べた結果、彼は変身魔法を使っているようです）』

「（変身魔法？）」

『（ええ、しかも術者である彼の元の年齢は多分5〜8歳ほどのようですね）』

「（そうか、ありがとう）」

何か事情があるのかなどと思いつつ、とりあえずルドヴィッヒさんを手伝いに行く。

「手伝いに来ましたよ。」

「お、おう。すまねえな。面倒かけちまって。」

「いいんですよ別に。……………そういえば掃除に来た割には手馴れていませんね」

とりあえず鎌をかける。

すると……

「ええと……いや……あの……ははは」

動揺していると言うか何とも素直な反応だ。

「それと……変身魔法まで使って何しに来たんですか？」

もう子供であると言うことは確実なので小声で目的を聞いてみる。

「ッ！……どうして分かった？」

「さっきも自分で行ってましたが、コイツは優秀なんですよ。」

『ふふーん、凄いでしょ』

…持ち上げるべきではなかったようだ。

「そうか、それでどうするんだ？俺を管理局に突き出すのか？」

「いえ、そんなことはしませんよ。第一突き出す前に管理局員である自分が捕まえますし、今回は目的を聞いたただけですしね。」

「……分かった。後で話す。」

「ええ、分かりました。」

話を聞くためにとりあえず作業を終わらせる。

そしてルードヴィツヒさんがこちらに来る

「さっきの続き話すからついて来い」

「はい」

ルードヴィツヒさんについて行くとアグスタの裏についた。それと同時に背後に攻撃の気配を感じ咄嗟にリナーを起動させ防御する。

「ッ………どうい………う………つ………も………り………で………す………か………!………?」

「………結構強く打ったんだがな……。コレを防ぐとは中々………」

「話したくないなら………そういえばいいじゃないですか!」

リナーでルードヴィツヒさんの拳を思い切り押し上げ対峙する。

「リナー!カードリッジロード!」

『了解で………す』

そして間髪いれずカードリッジを六発一気に読み込み魔方阵を展開する

「その程度の砲撃!」

「マジックバスケット発動!」

砲撃と勘違いしバリアを張ったルードヴィツヒさんをマジックバスケットで拘束する。

「くそッ………こんなもの!」

「カードリッジ四発追加してくれ」

『了解です。』

バインドの強化を施し、そしてその上からさらに余剰魔力でストラグルバインドをかける。

するとストラグルバインドの効果で彼の体が光り輝き、子供の姿に戻った。

「ぐう……」

「さて…目的を話してもらいましょうか」

「分かった、何が聞きたい？」

「それでは年齢と住所に名前。あとは目的を」

「年は9歳、住所は無い…っていうか決まった家が無いな。後名前は最初に自己紹介したとおりだぜ…」

彼はそれだけ言うと言に黙った。

「どうかしました？」

「………ここまでだな、話せることは」

「え？」

ルードヴィツヒさんの足元にベルカの魔方陣が展開される。

『ますたゝ。彼、転移しそうですよ』

「まずいっ……」

転移魔法を阻害しようとするが……

「遅いな」

時既に遅く、転移をさせてしまった。

「逃げられたか。リナー反応は？」

『駄目ですねゝ。わたし個人で探索しきれるレベルの範囲にいない
っぽいですしゝ』

どうやら彼はリナーが短時間で探索出来る範囲、ミッドチルダ全域
には居ないようだ。

「まあ名前と年齢は分かったから後で調べればいいか。」

『住所不定ですからねゝ。絞れば何人か候補が出てくるでしょう。
長い名前でしたしゝ』

「ああ。今から追っても仕方ないし、機動六課に戻って仕事を済ま
せるか。」

結局目的を聞くことも出来ず、彼を逃がしてしまったが今日はこれ
以上の追跡を諦め仕事をするため六課に戻る。

帰りも行きと同じくタクシーを捕まえ六課に戻る。

「機動六課まで」

「はいよ」

タクシーに乗って20分間。信号にも引っ掛からずすんなりと機動六課に到着できた。

「ありがとうございました。これ代金です。釣銭は結構ですので」

「はいよ、気をつけてね」

隊舎に入りすぐに掃除場所に行く。

掃除場所に到着すると掃除班の人が掃除を始めていた。

「皆さん遅れてすいません！すぐに掃除をしますね」

今日は遅くなったのでかなりペースを上げ、掃除を終わらせた。

「それでは」

今日の分の仕事を終わらせて寮に戻った。

「リナー、『検索ツール』を出してくれ」

『検索ツール』。本来の名前は「ディメンジヨワールドツール」というのだが長いので省略している

これは管理局のデータベースに接続し、名前や年齢を入力することによってその人物の素性を洗い出すツールだ。

本来これを使えるのは左官クラス以上の人間なのだが、様々な条件を呑んで使用許可を貰っている。

「えっと、ルードヴィツヒ・T・ヴェルファイア…年齢は九歳…と…」

知っている条件を全て記入して検索をかけると182件の人物がヒットした。

そこからさらに流れてくる顔写真を見ていくとルードヴィツヒさんの写真が流れてきた。

それをタッチすると情報が表示された。

すると、予想だにしない情報が表示されたのだった。

プロシードside end

くりくん10(後書き)

これから一体どうすれば………

一次創作でも書き始めますかね。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4923s/>

魔法少女リリカルなのはStrikers～掃除係の六課生活～

2011年11月12日03時37分発行